2Hp-12

生活情報の考え方とその教育

―― 短大における実践例を中心に ――

京都文教短大　中村博幸

【目的】　情報教育が教育の場で注目されている。家政系においては、それは生活情報の教育といった側面を持つ。その捉え方には次の二つの立場がみられる。(1)情報化社会の影響が生活の場にも及び、それに対応できる能力を育成する。(2)伝承・口コミなどによる生活情報を科学的に分析し、伝達の場や方法に情報科学の手段を用いる。しかし、そのいづれもが対症療法的である。そこで我々は、生活情報を次のようにとらえた。　「生活者が、あらゆる生活環境をコーディネートし、生活を最適化するために、収集・分析・整理し、発信するインタラクティブな情報」、つまり生活者の問題解決に役立つ情報、及び情報活用である。あくまでも、生活者に主体的に役立つ技術や能力である。この視点が家政系における情報教育には必要である。

【方法】　生活情報の教育には、次の要素がある。(1)情報処理教育…手段・技術の習得（アプリケーションソフトなど）(2)情報活用演習…応用技術習得（具体的問題解決）(3)生活情報論…情報活用能力育成（情報的に豊かな生活を送る為に）高等教育では、この３本柱に分けられて授業されるであろう。(1)は、いわゆる情報処理の教育でもカリキュラムに注意すれば可である。しかし(2)(3)は、家政系独自のカリキュラムが必要となる。

我々はこの考え方で実践をおこなってきた。例えば(3)生活情報論については、文教短大生活科学及び服飾専攻において「生活工学」講義で、情報の捉え方、生活における情報活用能力、自己実現と生活情報などを事例を交えながら授業を行っている。

【結果】　学生のコメント等から・多くの情報には裏がある事がわかった　・新聞の国際経済を読むようになったという現象面ばかりでなく、情報を読む視点が変わる　・個性的生活の必要性の認識など内面の変化が読み取れた。